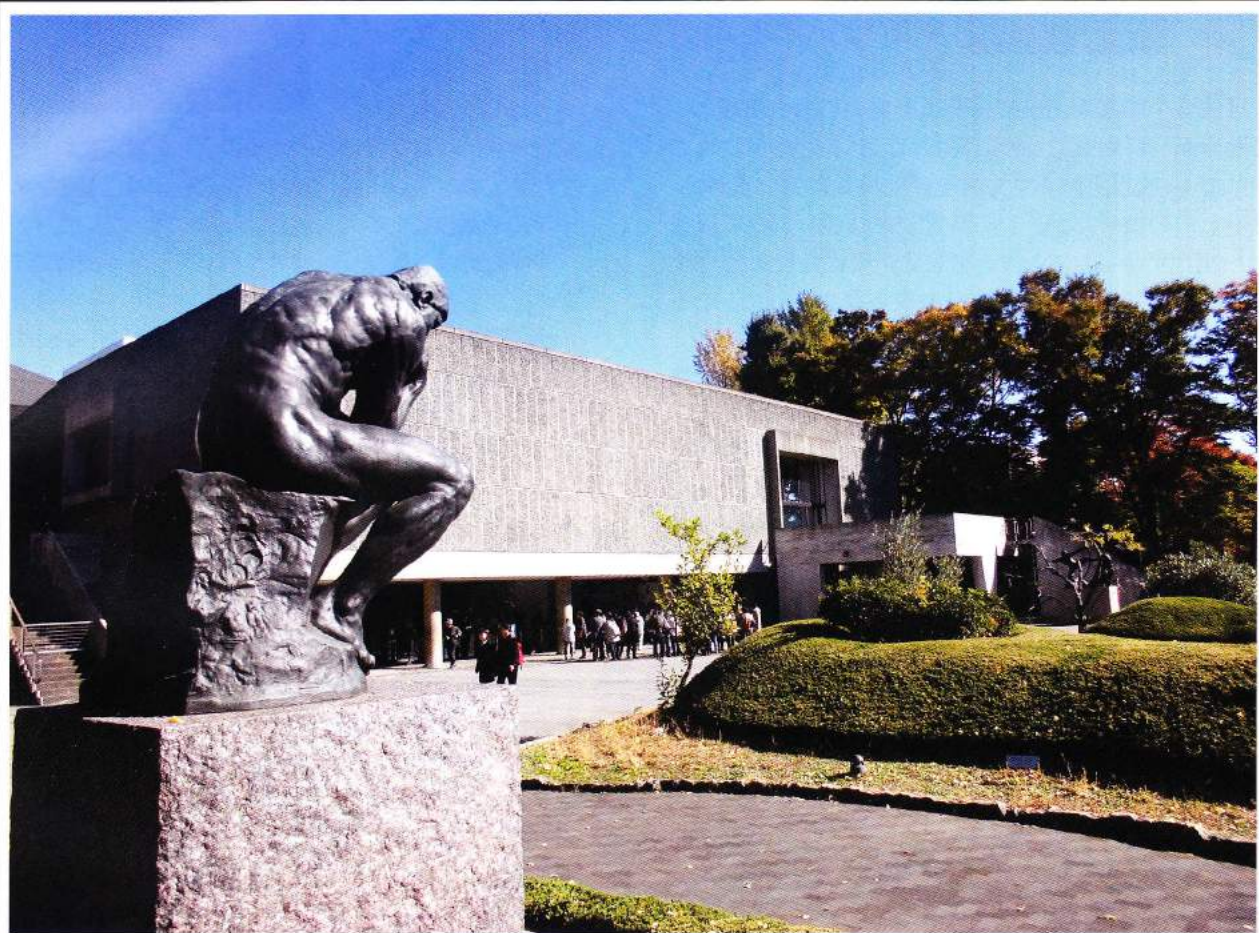


臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報
平成30年(2018)新春号



国立西洋美術館（東京都上野公園）

国立西洋美術館は、2016年（平成28年）7月17日、「ル・コルビュジエの建築作品 - 近代建築運動への顕著な貢献-」という名称で6か国16作品とともに一括して文化遺産に登録された。

国立西洋美術館は、①ル・コルビュジエ（フランス人建築家）が日本に残した唯一の建築作品であること、②ル・コルビュジエが提唱した近代建築の五原則を表現し、「無限発展美術館」の思想を体現していること、③日本における近代建築運動に大きく貢献したこと、などが評価されたもの。

その昔、上野の丘陵には、藤堂高虎、津軽信牧、堀直奇の屋敷があった。国立西洋美術館とその向かいにある東京文化会館あたりは、村松藩祖堀直奇の屋敷跡で、徳川幕府が江戸に寛永寺、東照宮を造るとき、堀直奇が屋敷地を幕府に献上し、陵雲院というお寺を造ったが、その跡地になる。

～歴史と伝統校の灯りは消えない～

松高東京同窓会会長 金子 鶴男（高5回）



初春を迎え皆さまにはお変わりなくお過ごしのことと存じます。

本年の十二支の花は蔓梅擬(つるうめもどき)です。つる性植物で山地に生え、秋には大変綺麗なオレンジ色の実になります。

平成27年度新潟県教育委員会発表の県立高校の再編計画「将来構想」の素案では、少子化に合わせて全県で14校以上減らす方針を示しました。具体名は示していませんが、1学年3学級以下の学校で統廃合を検討するとしており、平成27年に生徒を募集する高校84校のうち22校が対象となりました。その22校中に我が母校松高も検討再編対象に入っていました。教育委員会の「10年間を見据えた再編成整備計画」は生徒減や高校に求められるニーズが大きく変わりつつある中で、魅力的な高校であり続けるための「あるべき姿」を示したものとなっています。平成27年に2万1700人の中学卒業生が10年後の平成37年には約1万8000人にまで減少すると予測され、その対応として学校の統合を行い、中等教育の視線化が行われています。

図1 新潟県の中学校卒業生数の推計



注) 2016年5月1日現在の高等学校教育課調査による。ただし、2013～2016年度は実績。なお□内の数値は対前年度増減数を表す。

*新潟県教育委員会提供資料を基に編集部で作成

今以上に推進するために、中高一貫教育を新設することや、生徒の多様な学習ニーズに対応するために、総合学科の拡充を図ることなども計画いたしました。

現在、中高一貫教育校は数校設置され、総合学科の募集定員は県内高校の全入学者定員の1割を超えています。中高一貫教育校の存在は、3年制の中学校や高校にとっても、よい刺激になっています。

中学校では、生徒や保護者から選ばれる学校になるために、各校が特色のある教育を打ち出しています。高校でも、中高一貫教育に負けない、質の高い教育の実現に向けて、様々な実践に取り組むなど、県全体の中等教育の活性化につながっています。「将来構想」基本方針を示し、様々な分野で活躍できるグローバルな人材を育成する教育の推進や、県外の生徒も学びたい魅力的な学校づくりの推進などを県教育委員会は提案しています。

高校は元来広域性を大きな特徴としています。生徒はそれぞれ自分の入りたい高校に通うのが基本です。

荒木同窓会会長は会報・松城34号35号に母校の危機に対応を掲載されています。タイトルは「伝統ある松高存続の危機にどう対応するか」「松高はもともとブランド校でありました」で現状を訴え「松高を存続発展させる会」を立ち上げました。地域への理解を深め、固い絆に結ばれた人づくりに邁進されています。

我々同窓生一同も、母校の危機感を再認識した上で本部会長と共に母校の発展という目標へ共に向かいましょう。我が東京同窓会も時代の変化に合わせ、母校の発展に尽力しなければならないと考えています。

「夢とロマンの同窓会」を発展させ歴史と伝統校の灯りを守り抜こう！をスローガンにして。



厚い信頼！ 松高魂！

村松高校 東京同窓会 第61回総会 講演 演題「サードエイジこそ人生の華（仮題）」のお知らせ



観光客に北大構内をガイドする望田武司氏

《講師のプロフィール》

1943年 新潟市に生まれ、新潟県立村松高等学校から東京都立大学（現首都大学）に進み、卒業と同時にNHK入局。社会部記者、各ニュース番組デスク・編集責任者を歴任。

2003年退職し、札幌に終の棲家を求める。現在、観光ボランティアガイドをしながら自然観察に親しむ一方、エッセー「北国の便り」をメールで発信。

・平成30年6月2日（土）12：00頃より
講師：望田 武司 氏（札幌松城会 高14回）

● 講演内容

自らの体験を生かして、こうあればいいなあと思える。

● 著書

『敗軍の将、輝く 榎本武揚“生きざま”の検証』

中西出版、2013年10月、初版

2017年11月、2刷

榎本武揚は明治41年10月26日永眠。享年73。東京の新聞は、榎本武揚の葬儀を盛大な“江戸っ子葬”と報じた。函館戦争で敗れ、明治を生き抜いた男は、国際感覚を持ち合わせた新しい時代の真のリーダーであった。

『揺れ動くまな板の上の鯉』

東京図書出版、2016年12月

特大直径7センチのがんを発見。恐怖・不安・絶望から生還へ。自らを見つめ、ほぼリアルタイムで綴った元ジャーナリストの闘病記。

『奇跡の生還 大黒屋光太夫の足跡』

大黒屋光太夫顕彰会、2018年3月

知れば知るほど驚きの人生。漂着したロシアに10年。数奇な経験の一船頭が帰国して日露外交の先導者に。

平成30年度 県立村松高等学校東京同窓会開催のお知らせ

◆日時 30年6月2日（土）

第61回定期大会

*午前11時半 開会

*12時頃より

望田武司氏の講演

◆場所 ホテル グランドパレス

千代田区飯田橋1-1-1

TEL：03-3264-1111

◆申し込み 事務局まで

20ページに掲載

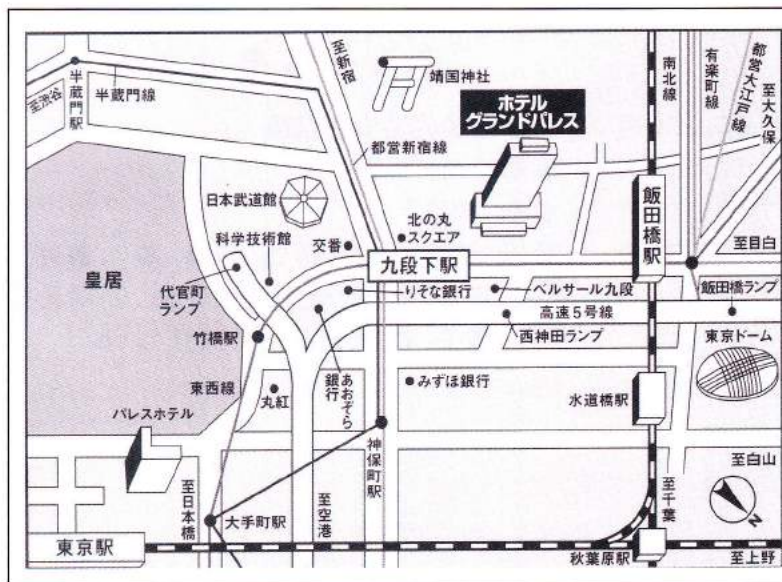
交通 ●地下鉄「九段下駅」

*東西線7番出口より徒歩1分

*半蔵門線・都営新宿線

3b出口より徒歩3分

●JR・地下鉄「飯田橋駅」より
徒歩7分



平成28年度 収支決算書

平成28年4月1日から平成29年3月31日まで

費 目		決 算 額	備 考
収 入	前年度繰越金	653,101円	
	会 費	1,396,000円	
	（年会費	540,000円）	180名分の会費
	（大会費	856,000円）	第59回大会出席者107名分会費
	寄付金等	104,000円	
	本部助成金	50,000円	
	雑収入	26,538円	救う会ピンバッジ代、受取利息
合 計		2,229,639円	
支 出	大会費用	1,004,645円	第59回大会経費
	会議室借用費	60,040円	常任幹事会、幹事会、おけさ会他
	広報活動費	175,645円	会報発行関連費とホームページ他
	通信費	140,420円	ハガキ代、郵送代他
	渉外費	108,000円	本部同窓会出席、県人会賛助会費他
	諸雑費	124,335円	封筒作成費、振込代、コピー代他
	合 計	1,613,085円	
(収入)2,229,639円－(支出)1,613,085円＝616,554円 次年度へ繰越			

決算及び収支報告書は監査の結果、適正に処理されていることを認めます。

平成29年 4月22日

会計監事 片柳 ムツ ㊞

会計監事 高岡 五百子 ㊞

以上の通りご報告いたします。

平成29年 6月 3日

東京同窓会会長 金子 鶴男 ㊞

財務委員長 徳永 道子 ㊞

平成28年度 寄付者と寄付金（敬称略）

“まことにありがとうございました”

60,000円 村松高校同窓会ご祝儀
 10,000円 五泉市長ご祝儀
 8,000円 金子 鶴男
 2,000円 篠川 恒夫、山崎 輝雄、塚田 勝、吉井 清、片柳 ムツ
 石黒 四郎、大橋 貞夫、佐藤 昶、高岡光夫、斎藤 正義
 徳永 道子、高岡 五百子、高見 ハル

寄付金合計 104,000円

平成29年度 東京同窓会事業計画

【一般事業】

随 時	会員名簿・幹事名簿等の加除修正発行及び保管（総務委員会）
6 月 3 日	平成29年度定期大会の開催 会場・ホテルグランドパレス
8 月 2 0 日	本部同窓会総会への出席
2 月 日	東京同窓会会報誌 新春号（NO59号）の発行（広報委員会）
2 月 日	東京同窓会平成28年度決算見込みと平成29年度予算案の策定（財務委員会）
随 時	東京同窓会ホームページの更新管理（広報委員会）
随 時	東京同窓会の運営に伴う会則の改正（総務委員会）
随 時	東京同窓会幹事及び会員等研修会の企画立案（総務委員会）
随 時	他校同窓会との交流会等の企画（総務委員会）
随 時	東京同窓会所有物品の整備及び管理保管（財務委員会）

【特定事業】

随 時	「甦れ 松高！」 母校の発展を考える会運動の企画及び実施（総務委員会）
随 時	東京同窓会会員増強へ向けた取り組みの企画及び実施（総務委員会）
随 時	東京同窓会の広報宣伝及び会費増収手法の研究（広報・財務委員会）

平成29年度予算書

（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）

	費 目	予 算 額	備 考
収 入	前年度繰越金	616,554 円	
	会 費	1,450,000 円	
	（年会費	570,000 円)	3,000×190 名
	（大会費	880,000 円)	8,000×110 名
	寄付金等	100,000 円	
	同窓会本部助成金	50,000 円	
	雑収入	1,000 円	預金の利息等
	合 計	2,217,554 円	
支 出	大会費用	1,000,000 円	第60回大会経費
	会議室借用費	60,000 円	常任幹事会、幹事会、各委員会の開催
	広報活動費	190,000 円	同窓会「会報」発行関連経費
	通 信 費	150,000 円	はがき・切手代、宅配便等
	渉 外 費	130,000 円	本部同窓会へ出席、県人会賛助会費他
	諸 雑 費	120,000 円	ホームページ、コピー代、消耗品等
	予 備 費	567,554 円	
	合 計	2,217,554 円	

以上、提案いたします。

平成29年6月3日

東京同窓会長 金子 鶴男
財務委員長 徳永 道子

村松高校東京同窓会 第60回記念大会報告

広報委員長 石黒 勝夫 (高14回)

第60回となる記念総会を、6月3日(土)、千代田区飯田橋のホテル グランドパレスにおいて開催した。

来賓として同窓会本部の荒木快英会長、母校から渡辺欣彦校長、母校の後援会長で五泉市の伊藤勝美市長、交流団体の長岡工業高校同窓会東京支部の樋口昭支部長のほか6名、同窓会本部副会長2名及び事務局から3名を迎え、約80名の会員が出席した。

司会・進行は石井清和(高20)・阿部モヨ子(高22)の両氏が担当。

第一部総会は、最初に金子鶴男会長(高5)が挨拶した後、ご来賓の祝辞に入り、荒木同窓会長から渡辺校長へ。渡辺校長からは、会員・同窓生も心配している母校の存続について「すぐに統合や廃止ということは無いのでご安心を！」とのお話があり、出席者一同はひとまず安心した。続いて伊藤五泉市長、樋口支部長から心温まるご挨拶をいただいた。この後、総務(佐藤勉・高11)・財務(徳永道子・高12)・広報(石黒勝夫・高14)の各委員長から、1年間の活動報告(会計監査報告を含む)があり、それを承認した。

第二部は、行政書士で社会人落語家である高座名天神亭きよ美さんによる創作落語を、笑いの中にも真剣さが漂うお話を楽しんだ。演目は2題。

一つは「天国からの手紙」。息子二人、娘一人を残してあの世に旅立つ母。天国の案内人に出会い、相続が争続となることを聞き、遺言書と手紙をしたため残してくる。

いよいよ三途の川を渡ろうとすると、大事なことを思い出す……というもの。二つ目は「人生を楽しむための笑(エ)ンディングノート」講座。エンディングノートを書くことで、自分の人生と向き合い、自分自身を見つめ直すきっかけになること。人生を悔いなく笑顔で過ごすためにもエンディングノートを活用しようというお話でした。終括にはまだまだ早いと思われる年代の出席者ではあるが、中には話のポイントにいちいち頷き、真剣にメモを取るなど、熱心に耳を傾ける姿が見受けられた。

第三部の懇親会は、篠川恒夫顧問(高2)の乾杯の音頭でスタート。会場には、ふるさと新潟の二つの蔵元から取り寄せたお酒やワインも振る舞われ、懇親の場の盛り上げに貢献。久しぶりの再会を喜び合い、近況を交歓したり、友の消息を尋ねたり、あちこちで賑やかな同窓の輪が広がった。途中からは、着替えを終えられた天神亭きよ美さんも加わり、交流の輪が一層広がった。

懇親会も佳境に入り、真水道子さん(高10)・山田俊治氏(高14)が先導して「佐渡おけさ」の踊りの輪が会場一杯に広がり、やがて校歌・応援歌が会場に響き渡る中、最後は、鈴木多喜男顧問(高4)の中締めで散会。参加者には、第60回記念大会の記念品として、国の登録有形文化財である母校の校門と校歌が刷られたクリアファイルや、校章(長工の校章と併せ)が刺繍されたバندانが配られ、出席者は大事そうに抱えながら再会を約して会場を後にした。

東京同窓会・第60回記念大会収支報告書

平成29年6月3日(土) 於 ホテル グランドパレス

収入の部 (単位:円)		支出の部 (単位:円)	
①会費 (88名×8,000円)	704,000	①懇親会費	669,162
②会員寄付金(有志)	46,000	②講師謝礼他	55,400
③同窓会本部祝儀	80,000	③同窓会本部対応費	59,328
④伊藤五泉市長	10,000	④通信費	51,248
		⑤諸雑費	97,035
収入合計	840,000	支出合計	932,173
一般会計から補填	92,173		
総計	932,173	総計	932,173



伊藤勝美五泉市長



渡辺欣彦校長



荒木快英同窓会長



金子鶴男東京同窓会長



東京同窓会 第60回記念大会出席者名

於 ホテル・グランドパレス 3F「白樺」 平成29年6月3日

来賓・他(18名)	高校(21名)	高校(20名)	高校(25名)	高校(14名)
講師 生島 清身 様	02 篠川 恒夫	09 石黒 四郎	15 鈴木 長五	20 石井 清和
		09 増田 訓英	15 高岡 光夫	20 阿部 慶子
同窓会本部長	03 渡辺 八郎			20 三宅 紀子
荒木 快英 様(高4)		10 大橋 貞夫	16 郡司 正大	
同窓会本部副会長	04 鈴木多喜男	10 宮沢 正由		22 平山 誠一
浅田 光雄 様(高20)	04 梶屋 庄佑	10 真水 道子	17 黒井登起雄	22 阿部モヨ子
滝沢 義則 様(高22)	04 辻川 登	10 小島 典子	17 佐藤みどり	22 松澤 綾子
同窓会本部事務局			17 前田 悦子	22 大橋 利光
熊倉 洋子様(高20)	05 金子 鶴男	11 佐藤 赳	17 斎藤 豊	22 吉井 修
熊倉 富美子様(高20)	05 山崎 豊吉			22 笠原 和夫
酒井 加代子様(高20)		12 近藤 洋輝	18 斎藤 正義	22 山田 俊治
	07 宮川 裕皓	12 高岡五百子	18 青木 敏和	22 難波 幸博
同窓会五泉会会長	07 加藤 喜七	12 徳永 道子	18 笠原 静夫	22 柴野 暢夫
日高 太郎 様(高14)		12 桑原 トム	18 川名ハルミ	22 久保 俊栄
	08 鈴木 輝雄	12 今井 英雄	18 岩野ハナエ	
村松高校 後援会長	08 高地 彰	12 安部 寛	18 石井 清昭	25 林 信子
五泉市長	08 塚田 勝		18 三室 茂和	
伊藤 勝美 様	08 木村 孝子	13 小黒 雅晴	18 江口 浩市	
村松高校 校長	08 波多ミサエ	13 金子 健二	18 大原 百合	
渡辺 欣彦 様	08 岡部 ユキ		18 渡辺ひろえ	
	08 山西愈佐子	14 石黒 勝夫	18 田中 弘子	
長岡工業高校 同窓会	08 久我 マキ	14 斎藤 正克	18 須佐 信彦	
東京支部長樋口 昭 様	08 山崎 輝雄	14 山田 俊治	18 松村 テル	
副支部長 原 勝英 様	08 片柳 ムツ	14 横溝美恵子	18 五十嵐 力	
事務局長 大関 稔 様	08 稲垣美知枝	14 猪口 成吾	18 高岡 英治	
統括理事 金井 博光 様	08 吉井 清		18 佐藤 洋子	
統括監事 片桐 謙一 様				
理事 山川 昭男 様			19 佐藤 知伸	
理事 川村吾一 様			19 石黒 久七	
賛助会員				
小倉 和助 様				

出席者合計98名



生島清身さんの創作落語講演



上は篠川恒夫顧問の乾杯音頭
右のテーブルは長岡工業の皆さん。
奥は出番を待つ各委員長



ご挨拶

村松高等学校 校長 渡辺 欣彦



新年あけましておめでとうございます。同窓会の皆様には、お元気に新しい年をお迎えのことと存じます。日頃から松高の教育活動にご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。また、昨年の東京同窓会第60回記念大会では大変お世話になり、誠にありがとうございました。お陰様で楽しく過ごさせていただきました。同時に、皆様が松高をこよなく愛しながら、故郷を離れて活躍されていることに感銘を受けました。そして、松高の一層の発展のために粉骨砕身していかねばならないという思いを改めて感じました。最初に、今年度の松高の様子を報告させていただきます。松高では、「分かる授業の実践」「キャリア教育の充実」に力を入れて取り組んでいます。「分かる授業の実践」では、1年生の英語・数学と2年生の数学で、1クラスを半分にして丁寧で目の行き届く少人数授業を行っています。また、各学年の教室には同窓会から寄付していただいた電子黒板が設置されていますので、写真や動画を使うなどして分かりやすい授業を行っています。さらに、電子黒板同様、同窓会から寄付していただいたエアコンも普通教室に完備されていますので、授業は勿論のこと進学指導や就職指導などで、夏でも快適に学習することができます。

「キャリア教育の充実」では、一人一人の進路希望が達成できるよう、1年生は職場・上級学校見学（7月26日）、2年生はインターンシップ（夏季休業中3日間）・マナー講習（12月）、3年生は五泉市合同企業説明会（6月21日、本校会場）・面接指導（7月以降）というように、3年間を通して計画的にキャリア教育を行っています。現3年生の進路状況は、昨年度は大学進学者がいなかったのですが、今年度は4年制大学に5人、短期大学に2人進学する予定です。また、9月末時点の就職内定率は89.3%（昨年度は67.2%）で近隣の高校の中でも1番の内定率となっています。

6月7日に行われた体育祭では、晴天にも恵まれ地域の方からもたくさん来ていただき大変盛り上がりしました。昨年度まではクラス対抗だったのですが、今年度は各学年を縦割りにした3軍で競技を行い、3年生がリーダーシップを発揮して、1・2年生を上手くまとめ上げていました。

部活動では、野球部は、10人という少人数で非常にまとまりのあるチームで期待していたのですが、甲子園に向けた県予選では、残念ながら1回戦で新発田高校に惜敗しました。運動部では他に、バスケットボール部・サッカー部・バドミントン部を中心に、毎日

練習に励んでいます。

文化部では、インターアクト部は、昨年度は広島で開催された全国高等学校総合文化祭に出場しましたが、今年度は、毎月地域の催し物や老人ホームなどの

施設に出かけて地域との交流を図っており、地域の方からも大変感謝されています。また、8月20日に新瀧で開催された同窓会総会で演奏を披露した吹奏楽部は、今年度から部に昇格して、少人数ではありますが顧問の先生の指導を受けながら、毎日一生懸命練習をしています。次に、今年度の新たな取り組みとして、毎月1回その月の学校行事を中心に編集した「松城健児だより」を中学生向けに作成しています。このPR誌は、松高HPにもアップし、五泉市内の4学校（村松桜・五泉・五泉北・川東）、五泉市役所、村松支所、五泉図書館、五泉市総合会館などにも置かせてもらい、本校の教育活動について積極的にPRしています。

次に、昨年7月6日に公表された「県立学校等再編整備計画」についてです。松高の平成30年度募集学級は、1学級減の2学級となりました。私としては想定外だったわけですが、県教育委員会は募集学級を決めるに当たって志願者数を重要視していますので、現1学年の志願者数が大幅に減少したことが、今回の募集学級1減につながったのではないかと考えています。参考までに、県教育委員会は望ましい学校規模を1学年当たり4～8学級としています。実際には、県立高校は81校（中等教育学校6校除く）あるのですが、平成32年度までに4学級未満の学校が32校・約40%となる予定です。募集学級が1減になったとしても、松高の存続をかけて引き続き本校の特色ある教育活動について積極的にPRしていくことが重要であると考えています。

最後に、昨年9月、同窓会からの寄付により、本校の正面玄関前に「誠を尽くし、志をたて、必ず実行する」と書かれた懸垂幕を掲げました。松高HPのトップ画面からも見るができます。この松城精神を確実に受け継ぎ、松高を母校として、心から愛し、「誇りを胸に」活躍してくれる有為な人材の育成に今後とも努めてまいりたいと考えております。

今後とも、母校・松高の教育活動にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

平成29年村松高等学校の本部同窓会総会に出席して

平成29年度母校同窓会の本部総会が、昨年8月20日（日）、午後4時から村松の割烹「新龍」において開催された。

東京同窓会からは、金子鶴男会長、吉井清副会長兼事務局長、山崎輝雄副会長、石黒四郎副会長、大橋貞夫副会長ほか10人が出席し、例年になく出席者数となる。



上は荒木同窓会長

はじめに、本部の荒木快英会長の挨拶があり、「松高を存続発展させるための署名活動」は現在約1万5千名の協力を頂いている。母校を栄光ある学校によみがえらせるため、「松高を連携型中高一貫校に」と「松高を存続させる運動」を一体にして努力していく。母校をこの地域になくてはならぬ学校として、各位にも引き続きご協力を頂きたい。



金子会長からは、総会に出席する前に有志6人が新潟県政記念館を見学し、国指定重要文化財の県議会旧議事堂を興味深く見てきたが、県政の歴史認識を新たにすることが出来、大変勉強になった。

続いて6月3日に開催した第60回記念大会の報告と、60回を祝して作った記念品等の説明があった。また、天神亭きよ美さんの創作落語の話は、年配者にとって非常にためになったとの感想があり、第61回大会も面白い講話を予定しているので、多くの方々のご参加をよろしくお願い致しますと挨拶。



渡辺欣彦校長より松高の現状報告とさらに、「分かる授業の実践」「キャリア教育の充実」に一層力を入れていく。また、地域との交流を図り、月1回の「松城健児だより」を各方面に配布し、HPにもアップしている。今後とも松高存続のために、特色ある教育活動を積極的にPRしていくと表明。



今年、出来立ての女子吹奏楽部員による演奏



来賓各位のテーブル

北大ポプラ並木のルーツ

札幌松城会会員 望田 武司（高1 4回）

北海道大学構内には連日ポプラ並木を見ようと観光客が訪れているが、このポプラ並木は観光のために植えられたものではない。当時の札幌農学校の広い農地を区分するために、農道に植えられたものである。しかし枝が垂直に上に向かって伸びるポプラは風情のある木、それが連なったポプラ並木は、牧歌的な北海道のイメージとオーバーラップし、いまでも北大構内を訪れる本州の観光客は、必ずポプラ並木まで足を延ばす名所となっている。



実はポプラは北海道自生の木ではない。外来種である。誰が持ち込んだのだろうか。

ここから物語は始まる。

明治時代、「佐々城家」という格式の高い家に生まれた信子（写真右）は、当時としては珍しく進んでいる女の子というか、とんでる女で、家の中に閉じこもっている“大和なでしこ”ではなかった。



16歳の時、国木田独歩という小説を書く男と知り合い、この男と一緒にいたいという。これに対し親は猛反対、氏素性もよくわからないうえ、まだ売れてもいない“へなちょこ貧乏物書き”と一緒にするのはけしからんという親の意向に逆らって、伸子は国木田独歩と一緒にいる。

ところが独歩と信子の生活は、親が心配していた通りうまくいかなかった。極貧の生活に悲鳴を上げて、信子はわずか5か月で実家に戻ってきた。

こういう出戻りの娘がいるのは家の恥である。佐々城家は親族会議を開いて、信子の弟がキリスト教を通じて知り合った友人の兄に嫁がせることになった。信子はや親のいいなりになるしかなかった。

札幌農学校を卒業した男は信子と婚約したあと、農務省の海外派遣農業実習生に合格し、先に単身シカゴに着いた。このあと横浜から日本郵船の鎌倉丸に乗ってアメリカに向かった信子は、こともあろうに長き船旅の間に鎌倉丸の事務長とできてしまった。信子をのせた鎌倉丸はシアトルに着くが、信子はアメリカの土を踏まず、U

ターンして日本に戻り事務長と一緒にいる。

あれれ、この話どこかで聞いたか読んだことがある、という方も多いと思われる。それもそのはず、有島武郎の名作「或る女」とは佐々城信子のことである。佐々城信子は草月葉子、男は木村貞一として描かれている。

この船旅には、たまたま後に鳩山一郎の母となる鳩山春子が同乗していた。春子は船内で人目はばかることなく事務長と手をつなぎ、チュウチュウしていた信子を大和撫子の恥であると糾弾する。後に共立女子大学の前身となる学校を創立して、三従の教え（女は嫁せずして父に従い、嫁して夫に従い、夫死して子に従う）をモットーに、謙虚でつつましい良妻賢母を世に出す教育を行おうとする春子にとって、信子の言動は見て見ぬふりすることはできなかったのであろう。

帰国後雑誌にこの“とんでる女”を批判して、当時大いに話題になったという。じつは草月葉子に扮する佐々城信子に袖にされたあわれな木村貞一こそ、札幌農学校二代目校長・森源三の長男・森広であった。この森広が、札幌農学校にポプラを送った男である。

森源三は長岡藩（新潟県）の藩士である。その長岡藩が戊辰戦争で北越路を東上して、怒涛の如く攻めてくる新政府軍に対し、和睦を申し入れたのが家老の河井継之助だった。内戦は第3国に侵略の口実を与えるだけだと幕府に進言するなど、小藩ながら中央にまでその名を知られた名家老である。（写真左側）



河井継之助は長岡の隣の小千谷の慈眼寺で、新政府軍の先陣軍監で、二回りも違う23歳の岩村精十郎（土佐藩士：右側）と会談する。

年下の岩村を丁重に迎えた河井は「長岡藩は恭順する、隣の会津藩を説得したい」と和睦を申し入れる。これに対し岩村は時間稼ぎだとして相手にせず、「朝敵だ、朝敵だ」とののしるばかり、河井は席を立とうとする岩村の袖を引いてまでして懇願するが、岩村は振り払って姿を消す。これで長岡の運命は決まった。

長岡の町は火の海となり、長岡城は落城する。河井は

最前線で新政府軍と戦うも銃弾を受けて負傷し、まもなく戦死する。このとき長岡藩主は、このままでは河井家はお家断絶となり、家族の命が危ないとして河井継之助と縁のある森源三(写真)に対し、継之助の母や妻子を連れて逃げよと命じた。



この森源三に、暖かい手を差し出したのが新政府の実力者、開拓長官の黒田清隆(薩摩藩士)である。黒田は幕末江川太郎左衛門の塾で森源三とともに机を並べた間柄であった。黒田は箱館戦争の時、敵の大將榎本武揚の救命運動を起こすなど、有能な人材を受け入れる度量を持っていた。

森源三を仕官させ、明治9年札幌農学校開校のとき事務長となった森源三は、クラーク博士の下で仕事をしたあと、2代目の農学校校長にまで出世し、新渡戸稲造や内村鑑三らに直接卒業証書を手渡す立場になった。

また明治14年初めて札幌を行幸された明治天皇に、札幌農学校をご案内する荣誉に浴する。朝敵と言われた長岡藩士が天皇を直接ご案内する、森源三はこれで朝敵の汚名を晴らすことができた感激する。

森源三が事務長となってクラーク博士を迎えた年に長男広は生まれる。

札幌農学校を出たあと農務省の農業練習生としてシカゴに渡り、妻となる佐々城信子を迎えることになるが、結果的にコケにされた形となる。女に袖を振られた哀れな男として描かれた森広の実像は、全くそうではなかったようだ。

森広は体育の時間に足を折って障害者となり、前途に希望を失いかけていた時、キリスト教に出会う。札幌ではクラーク博士の薫陶を受けた新渡戸稲造らが卒業して、次第に札幌を離れるにつれて、キリスト教が一時廃れかけていた時期もあったが、森広はクラーク博士の火を消

すなど、札幌独立基督教会の日曜学校の校長として灯を燃やしつづけ、この影響で、友人の有島武郎なども教会に出入りするようになった。

また一時札幌バンドに背を向けていた内村鑑三を説得して、札幌に足を向かせた。このようにクラーク博士が札幌農学校に迎えられたとき、オギヤーと生まれた森広は、敬虔なクリスチャンになってクラークの申し子のようにキリスト教の布教につとめた。

有島武郎と森広は札幌農学校の同期生で親友でもあり、有島はアメリカで傷心の森と会っている。

そして破談話に及んだ時、森は思わずさめざめと泣いたという。親友を迎えてあふれてしまった涙だろうか、慰めようもない涙だったという。有島はこれをヒントに「或る女」を書いた。しかし森広は痛手から再起する。

その再起に大きな力を貸したのが、逞しい成長力をみなぎらせてそそり立つポプラではなかったのかと研究者は言う。ポプラを札幌農学校に送ったのは婚約者に去られたからのことであつた。

これを受け取ったのが農場責任者の南鷹次郎(後の2代目北大総長)で、南の指示で農道に並木のように植えられた。



森広はポプラの苗木を農学校だけでなく、札幌の友人にも送っている。「俺はくじけていないよ、真っすぐ伸びているポプラのように元気だよ」、と伝えたかったのだろうか。悲劇の森広を励ましたポプラは、今日でも多くの観光客の目を楽しめている。

ちなみに長岡藩には河井継之助の他に、もう一人剛腕で知られた山本帯刀という家老がいた。山本は戦闘の最中に捕えられるが、恭順すれば命を助けるという新政府軍の申出に「わが殿からは戦えという命令は受けているが、降伏せよという命令は受けていない」と拒否し、阿賀野川の河原で斬首されて露と消える。

二人の家老は戦争の責任を一身に負わされてお家断絶となるが、後に再興して跡を継いだのが、河井家は養子に入った森源三の息子であり、山本家は同じく養子の山本五十六であつた。

北大構内の農道に植えられたポプラ並木の糸を手繰ると、いろいろな物語と歴史があつた。



農学校卒業記念写真：明治35年

インドネシア回想録

武藤 達家（高19回）

昨年（2017年）6月思いがけず、インドネシア勤務時代の環境チームのリーダーから電話が掛かって来た。ニューオリンズから東京に出張で来たとのこと。日本のかつての上司に連絡を取り、急遽、東京駅の近くで昼食を共にした。昔話にしばし花が咲く。77歳、76歳（リーダー）それに私は69歳である。あれからずいぶんとお互いに年を取ったものである。その後、仙台に行く機会があり当時の副社長兼製錬所長御夫妻にお会いした。インドネシアで共に修羅場を駆け抜けてきた上司である。ここでも当時を懐かしく語ることができた。2年に1度、グレスニック銅製錬所のOB会が東京である。去年はその年に当たる。

記憶は遙か23年前まで遡る。私は1995年2月19日、JL725便ジャカルタ行の機内にいた。インドネシア初の銅製錬所を建設するということで視察団の一員として参加していた。訪問先はパートナーである、フリーポートインドネシア社（以後PTFIと称す。本社は米国、インドネシアのイリアンジャヤ州に巨大な銅鉱山を所有）である。空港に近づくと、緑の大地に茶色く濁った大きな川がうねり、河口付近も広く濁っていた。海岸線には塩田が数多く観られるのが印象的であった。スカルノ・ハッタ空港に降り立つと、灼熱の太陽が降り注ぎ、独特の臭いが鼻をつく。空港に入ると大勢の人の群れが目に入ってくる。喧噪と渋滞の中を、PTFI社に向かう。挨拶を交わしたのち、歓迎会に臨んだ。そこでこれから一緒に仕事をする、フリーポート社（以後FPと称す）のメンバーを紹介された。翌日は我々（三菱マテリアル社、以後MMCと称す。）の代表がインドネシア政府（工業省）に行き、プロジェクトの概要を説明している。ジャカルタはインドネシア（当時人口は1.8億人）の首都であり人口は約2千万人とされていた。翌日は国内線でインドネシア第2の都市スラバヤ（人口約300万人）に移動。自動車、バイクの渋滞する道路の中央線上を、白バイの先導でサイレンを鳴らしながら、信号無視で走る光景を見て気が引ける思いをした。農村地帯を抜けて現地グレスニックに到着。大きな国营肥料工場の大会議室で大勢の関係者を前に我々のプロジェクト概要が説明された。製錬所で生産される硫酸は肥料の原料としてここに送られる予定である。我々のサイトは肥料工場に隣接し、海岸にマングローブの林がある以外は何もない野原であった。あちらこちらでヤギの群れがのんびり草を食んでいた。

インドネシア政府から環境許認可を一日でも早く取得するため、3月15日から月末まで必要書類の準備がPTFI社の会議室で行われた。実は何を隠そう、私が英語に関して「聞けない、しゃべれない」ことは、先の会

合で既に証明済みである。上司は「三菱連続製銅法」を技術導入したキッドクリーク銅製錬所（カナダ）出身で英国育ちのスウィーティン氏を通訳として同行させた。日本語はあいさつ程度しか話せない。この先どうなるかと不安を感じたものである。メンバーはFP社の取締役ジムがリーダー、環境課長のCJ・ドウワラン、（以上米国人）PTFIから副社長のサントソ、グラスベルグ鉱山出身のサレー（以上インドネシア人）、MMCはサブリーダーの春日環境部長（今回は欠席）それに私と、通訳のスウィーティンである。そして作業のまとめ役は環境コンサルタント会社社長のカール（ドイツ人）と部下のリディア（インドネシア人）で構成されていた。朝9時から夕方5時までホワイトボードを見つめ苦痛に満ちた長い一日が始まる。時々スウィーティンに、私が質問されていると言われ、その内容の説明を受けて答える。昼食は洋食、中華、メキシカンと日替わりで近くのレストランに出掛け、雑談して帰る。夕方5時過ぎホテルに帰り、夕食を早々に済ませ、スウィーティンの部屋に行く。彼のメモを見ながら、今日一日の会議をレビューしてもらい、自室に戻り日報に仕上げビジネスセンターで東京本社へファックスを送る。寝るのはいつも1時頃となる。毎朝、日の出とともに街のあちこちから拡声器で聞かされるイスラムのお経、コーランで起こされ、慣れるまで寝不足が続いた。毎朝6時（日本時間8時）に決まって日本の上司からファックスを見て質問の電話が入る。この時ほど2時間の時差が恨めしく思ったことはなかった。朝から晩まで英語漬けの15日間を終えたときには、ほっとした。しかしこの先は不安でもあった。その後、サブリーダーの春日部長（英語も、インドネシア語も堪能）が加わり、私はカバン持ちとして作業に加わることになった。部長と私は最終プレゼンテーション（1995年12月8日、環境省にて）までジャカルタ・ヒルトンホテルを定宿とし、少なくともどちらかはジャカルタに留まるようにした。コンサルタントとして別途、現地スラバヤのアイランガ大学のハーミヤン教授（法律学）、ムコノ博士（医学）が加わった。我々のプロジェクトは環境省がメインとなり工業省との合同で審査が進められた。本プロジェクトは香川県にある直島銅製錬所がモデルとなっていたため、環境省や工業省のお役人達を直島に案内し、町役場、漁業組合の協力を得て、銅製錬の理解を深めて頂いた。日本を更によく理解して頂くため、東京、大阪、京都の観光も組み込まれていた。食事は特に調味料といえども豚肉の入らない、アルコール分が含まれないハラル食品を食べて頂き、一日5回のお祈りの場所、時間に気を遣った。最終のプレゼンテーションまで、ジャカルタ中央政府、ジャワ州政府、グレスニック郡庁舎で幾度となく説明会が開かれ、何時まで続くのかと心配したものだ。この間本社からは何時になったら許認可がもらえるのかと、矢のような催促が来る。辛抱の甲斐があ

って、1995年12月8日、最終プレゼンテーションの日を迎えることができた。正式に銅製錬所建設のための許認可が出たのは翌1996年3月5日であった。

私と春日部長は幸運にもプレゼンを終えて、ジムに連れられ「地上最後の秘境」と言われたパプアニューギニア島のイリアンジャヤ州グラスベルグ鉱山を訪れる機会を得た。日本と時差がなく未だに裸族が暮らす土地である。当時独立運動が盛んでインドネシア軍が常駐する危険地帯でもあった。空港からジープで標高2千メートルのジャヤプラという鉱山町に行き一泊。翌朝ヘリコプターで鉱山に向かった。氷河がそびえる標高4千メートルにある巨大なオープンピット（すり鉢）やダイナマイトによる爆破作業、爆破後高さ3メートルもある巨大なタイヤ付きのショベルローダーが碎鉱を選鉱場に運ぶ光景は、まさに圧巻であった。木々を家形に組み土で塗り固めた住居が集落をなす山間を眼下に見下ろし、密林地帯をヘリコプターで麓まで下りた。戦前まで人肉を食べていた部族、今は法律で禁止されている。貴重な体験をすることが出来た。

1996年6月27日付でインドネシア銅製錬社（以後PTSCと称す）技術・環境部の辞令を受け取った。建設チームでの役割はプロセス屋として硫酸工場、排水処理工場の建設・立ち上げを担当することになった。7月に入ると建設工事が始まり、7月10日、会社設立のパーティーがジャカルタで経済産業省ユドヨノ大臣夫妻を主賓にその他来賓多数参加の下、インドネシアの儀式に従い厳粛に挙行された。12日はスラバヤに移動し現地でトゥンキー工業大臣を主賓に招き、ジャワ州知事他多数来客が参列する中、起工式が挙行された。その後本格的に建設工事が進められた。

1997年10月6日現地に正式赴任し、インドネシアで住民票を得て、再び建設工事に参加した。1998年2月頃から設備の引き渡し、立ち上げテストが続き、漸く4月14日アノード精製炉の火入れ式を迎えた。

その後の試験操業が続く中、忘れることのできない事件が起きた。1998年5月、ジャカルタで民主化運動

が盛んになり、あっという間にインドネシア全土に広がった。スラバヤでも、デモ隊が暴徒化し、街には軍隊、戦車が出動されるに至った。5月18日、日本領事館は緊急にパスを準備し、日本人のバリ避難を開始した。我々の家族、出張者はバリに避難し、そのまま帰国している。翌19日、ジャカルタ本社、スラバヤ現地の10名ほどはホテルで待機し、私は日本人スタッフ6名を連れて、混乱の中スラバヤ空港に行き、バリに避難した。一時は軍隊がスハルト派、反スハルト派に分裂し内戦の様相を呈し、不安は頂点に達した。21日スハルト大統領の辞任で暴動は収束し、23日私達もスラバヤに戻り、工場は幸い焼き討ち略奪等の被害を免れ、試験操業を再開することが出来た。

1999年11月1日、試験操業を漸く終了。11月16日、MMC社長他来賓多数出席の中、晴れて竣工式を迎えることが出来た。思えば長くて苦しい道のりであった。立ち上げ・試験操業は筆舌に尽くし難く、現場に寝泊まりすることもしばしばであった。責任の重さと不安で眠れない日々もあった。これまで指導、支援を頂いた多くの日本人、インドネシア人はじめ世界各地の関係者の皆様に心から感謝申し上げたい。

長かったインドネシア生活も、2002年9月12日事務所の玄関で見送りを受け、帰国の途に就いた。1995年2月19日から数えて出張ベースも含め7年半、多くの経験をさせて頂き、多くの人達に支えられたインドネシア生活も終わりを告げた。

我々の銅製錬所建設で従業員約500名他協力会社を含め約1000名の雇用を創成し、年間20万トンの国内初の電気銅を生産。その後年間30万トンに増産されている。これを機に日本の銅電線メーカーがジャカルタ近郊に工場を建設する等、我々はインドネシア経済の発展に大いに貢献することが出来た。近年インドネシアとの技術交流が盛んになり、昨年、一昨年と現地で教育した部下達が出張で日本を訪れ、立派に成長した姿を見せ、流暢な英語でプレゼンテーションするのを聴きながら22年前に思いを馳せる私がいた。



プランバナ（ヒンズー教世界遺産）を訪ねて
（1997年12月27日）



秘書Ms. Novaの結婚式にて
（1999年1月24日）

工学的に視る“さざれ石”

黒井 登起雄（高17回）

【プロローグ】

村松高等学校は、明治44（1911）年に旧制村松中学校として創立し、平成23（2011）年に創立百周年を迎え、今、百六年の歴史と伝統を誇っています。私は、新潟国体、新潟地震、東京オリンピックなどがあった翌年の昭和40（1965）年3月に卒業し、早くも52年の月日が経ちました。入学直後の4月には、創立50周年と当時の新体育館落成の記念式典があり、2日目には、串田孫一、森恭三の各氏による特別講演が行われたことを思い出します。卒業後の私は、一昨年（2016年）3月まで、「セメントコンクリートに関する製造技術および工学特性の研究」などを主体に、45年間にわたり大学教育とともに、研究室の学生と一緒に実験研究にも取り組んできました。

【コンクリートとは？】

コンクリートは、『Con-create』を語源とし、『骨材を結合してできる新しい複合材料』のことで、「セメントコンクリート」「アスファルトコンクリート」および「プラスチックコンクリート」があります。セメントペースト（セメント糊）を使って骨材（岩石を破碎して細分したもの）を結合した「セメントコンクリート」が代表的なものです。主に建設材料として多様な社会基盤構造物（橋など）に利用されています。「アスファルトコンクリート（アスファルト乳剤で骨材を結合）」も道路舗装などの建設材料に利用されています。また、高分子材料の重合によって骨材を結合した「プラスチックコンクリート」もあり、これらの製品（コップ、ボールペン、食品ケースなどの日用品のほか、冷蔵庫、洗濯機はじめ電化製品や自動車部品などの工場製品など）は、私たちの身の回りに溢れ返っており、重要な生活道具になっています。

【さざれ石と石灰岩】

「さざれ（細）石」は、「君が代」の歌詞に『君が代は、千代に八千代に、さざれ石の巖（いわお）となりて、苔のむすまで』と詠まれていますので、皆様ご存知と思います。戦後生まれの私には、小、中学生さらに高校生の時期に、入学式、卒業式などで何回も歌っていますが、「さざれ～」「石の～巖となりて～」と切り離して歌い、毎回、音楽の先生に叱られた（注意された）覚えがあります。当時、『「さざれ石」は何か？』の解り易い説明がなかったことによるものと思っています（説明があっても私が聞いてなかった？）。この「君が代」の歌詞の出典は、「古今和歌集」の『我が君は、千代に八千代に……』とも云われ、現在の歌詞と完全に一致していません。和歌としての出典と文学的解釈、昭和30（1950）年代からの学校現場における国歌論争などは、私の理解と知識があまりにも浅く、狭いために指し控えます。ここでは、「工学的に視る“さざれ

石”について記述しますので、正しく“さざれ石”を理解して下さい。「さざれ石」は、学術的に『石灰質角礫岩』と称し、『石灰岩が長い年月を経る間に雨水により溶け出し、溶け出した粘着力の強い乳状のカルシウムが小石間の空隙を埋めて、大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）と反応して石灰化（炭酸カルシウムに変化）したもの』と云われています。この反応が一個一個の小石を結び付け、次第に大きな小石の固結・塊状化へと成長していきます。これは、石灰岩を主成分とするセメントペースト（セメント糊）で骨材（碎石などの細かい石）を固化する反応と同じ現象で、同類とみなせます。しかし、近代（約百数年前）に開発されたセメントコンクリートは、より強い構造材料に改善され、進化しています（現在では、150Mp以上の超高強度コンクリートも製造できます）。わが国の「さざれ石」は、滋賀県と岐阜県に連なる伊吹山系の春日村（現在の揖斐川町）の谷間の溪流で見つけられ、前述の和歌が詠まれたと云われています。揖斐川町には、国歌「君が代」に由来する天然記念物の巨巖（きょがん）の「さざれ石」があります（私は、まだ観ていませんが！）。私が観た「さざれ石」



は、上記写真の4ヶ所だけです。「さざれ石」は、昭和36（1961）年に揖斐川町で発見され、伊勢神宮の内宮、外宮、明治神宮、神田明神、鶴岡八幡宮など、全国の多くの神社にも納められましたので、誰でも見ることができます。新潟県、埼玉県に「さざれ石」が奉納されているかは、「？」です（確かめたいものです！）。なお、わが国の石灰岩産地は、葛生地域の鉾山（栃木県）、武甲鉾山（埼玉県）など日本各地に40ヶ所弱があり、鍾乳洞が全国各地にあることから、多さを理解できると思います。

【エピローグ】

「さざれ石」は、長い年月を経て創り出される小石の塊であり、松高にも百年を超える教育の歴史の中で創り出された頑張りの精神を育む「伝統」があります。この『松城の精神』を膨らませつつ、新しい時代の教育機関として発展される松高を私も卒業生は期待しています。

春はあけぼの

鈴木長五（高15回）

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

この「枕草子」の冒頭は私にとっては忘れられない強いイメージで今も鮮やかな画像で頭に残っている。特に古典文学について興味があつたわけでもなければ、まして造詣などある筈もない自分がこれに反応したのは、文中の空の情景描写であつた。つまり自分の中にはあの情景に共鳴するだけの伏線があつたからである。

私は小学生の頃から川釣りが大好きでよく行っていた。旧五泉市の西では沈む夕日の能代川が、東の方では早朝早出川に架かる善願橋を渡ったすぐ向こう側を流れる天正川が主な釣り場であつた。

東の方、夜明けと同時に自転車で善願橋へ向うのだが、五泉の東の風景は、良く晴れた日には左に五頭山、右に菅名岳の稜線がはっきり見えて美しい。両山並みの裾端が地平線の中央で交差し、その交点を作る逆三角形の下方の頂点から上に向かって空が明けてゆく。この情景こそがまさしく後に遭遇する事になるあの「春はあけぼの云々」の景色そのものであつた。特に私が好きな箇所は「むらさきだちたる雲の」の描写である。紫色はおそらく雲の上側にできる日差しの影であろう。まだ日の光が雲の下側から射している時間帯の影であり、真昼に見る影は雲の下側に出る。ただ日本海側にある地元の空は完全な晴天が少なく、山の稜線も霞みがかっていることが多く、スッキリと晴れた美しい朝の空に出会えたときは心から嬉しかった。

こんな情景があつた冒頭文を知ってからは、文と画像がセットになり、自分だけの枕草子風景画としてしっかりと脳に定着した。但しそれはあくまで五泉で見る空の映像であり、まだ高校生だった自分には京都で書かれた文であることはまるで頭になく、後になって初めて京の空だったことを思い知ることになるのである。

或る時、多分50才前後位だったかと思うが、私は暇にまかせてテレビのチャンネルを適当に回していた時に、不意に「清少納言」という言葉が耳に飛び込んできた。懐かしさも手伝って、ちょっとした間じつとして聴いてみると、どうやら枕草子の原文を某女性の専門家が易しく解説をする教養番組のようであつた。途中からだつたが、その高説によれば、あの冒頭で謳っているのは単に春のあけぼのの情景だけではない。平安当時の貴族の一般的生活習慣の形として「通い婚」なるものがあり、あの情景描写の裏には、一夜を過ごした夫との別れ際の場面が隠されているのであるとか。従つてそれを読み解く事で

より文章の味わいが深まるというような内容であつたと思う。それを聞いた時に、耳の奥でアッと声が出たような衝撃を受けた。何故なら自分がそれまでに何十年も抱き続けてきたあの空の風景画が、視覚的には同じ構図と色彩でありながら、男女の別れ際にみる特別な情感の籠つた異次元世界に突如変貌してしまつたからである。

解説者の高説が果たして正解か否か？などは知る由もなく、私はただ、ああそうだったのかあ、と改めて納得するだけであつた。そして、今迄自分の思い描いていた風景画が微妙に修正された情趣に変化して、ひとまず気分は治まつた。が、実を言えばもう一つ。春あけぼの、と作者が断言したことには私は微かな疑問を持っていた。

先述のように、私の釣り場通いの経験からも、早朝の良く晴れた空は四季に拘わらず美しいものであるのに、作者は何故特別に「春」を指定したのだろうか？であつた。それが夜を共にした男女の別れのシーンをそこに当てはめて想像してみると、やはり春夏秋冬の中ではあの「春のあけぼの」が最も相応しいとも思えるので、これも解説者の説明に成程ねと納得はした。しかし、五泉の風景の中であのようなシーンを想像するには余りにも不自然で違和感があり、私の思つてきた風景にはまるでそぐわない。やはり元のままの風景描写だけのイメージの方が自分の好みには合っている。

それにしてもあの頃の自分には通い婚についての状況がよく呑み込めていなかったと思い、少し調べてみた。

平安貴族の結婚が成立までに至る一般的手順を要約すれば、最初は男性から女性に文（ラブレター）を送る→女性の親が文から相手の身分その他を考慮して娘の相手候補を絞り込む→親の認めた相手に対して娘が応じる文を送る→文のやり取りを重ねた後、何回かの簾（すだれ）越での面会→そこで意気投合すれば男性が女性の寝室に忍び込む→三晩続けて通ってきたら結婚成立・お祝い。

要はそこにはそれなりのルールがあつたのだ。げにモノをよく知らないという事は、上記のようにそれまで持ち続けていた固定観念が一変するほどの出来事を引き起こすものであり、自分はその見本のような体験をこの枕草子を通して改めてしたと思った。

また、最初から痛快なまでにキッパリと春の情景描写を書いている他には何も言葉に残さないその奥に、本当にあの解説者が言つたような別れの状況が隠されていたとすれば、この表裏の違いこそが清少納言の、というよりも、自分が勝手に想像する遺伝子的に延々と今日まで受け継がれてきた「京女気質」そのものではないのか。更に言うならば、京風文化特有の、本質を内に秘めて露骨に表には顕さず、違つた言い様で表現するといったある種の「したたかさ」に対しても、私は心底恐れ入つた。

関東在住 高18回生20名、神田に集う

江口 浩市（高18回）

昨年、11並びの11月11日11時、関東地域在住の昭和41年3月卒（18回生）の20名が、神田の居酒屋に集い、同期会を開催した。

その契機となったのが、前年の10月、卒業50年と古希を記念し、浜松町世界貿易センタービル39階のレストランレインボーで同期会を開催したところ、北海道や徳島、京都など遠方からの参加も含め約50名の同期が集まった。幹事として、東京湾を見下ろす眺望の良い会場を準備したが、眺望を堪能してくれることよりも、蛍雪の3年間、卒後50年の足跡を語り合う事で時間が瞬く間に過ぎ、語り尽せない思いでお開きとなってしまった。

昨年6月の東京同窓会第60回記念大会で再会した時、同期会開催の声が上がり、今回の開催につながったもの。たつぷりと確保したつもりの2時間半も短く感じられるほど、今回も盛り上がった同期会となった。

平成30年も同期会を開催することを決めて散会したが、70歳の18回生、まだまだ意気盛んである。



『友達の数で寿命は決まる——人とのつながりが最高の健康法』

以前に読んだ本のタイトル。

それによると、例えば、現役時代、仕事一辺倒だった人が、退職後は出掛けるところが少なくなる。すると、だんだんと外に出掛けることも億劫になる。いわゆる孤立してしまう。“孤立はタバコを吸うよりも健康に悪い”とも。

同期会や同窓会は、懐かしい人にお会いできる機会。出掛けやすいし、懐かしい話など共通の話題も盛沢山。また、元気ももらえます。

人生100年時代、お元気でご活躍を！

編集子

胃がん手術体験記

高岡 光夫（高15回）

嫌いな食べものはないでしょう、良く聞かれる。聞かれれば、食べものに好き嫌いがあるなんてぜいたくな、と思うほど胃腸に自信を持っていた。

そんな私が平成29年の春先に、時々お腹がシクシクすることに気付いた。シクシク感は5分ほどで治った。気付いた頃は、10日に1回位だった。それが1週間に1回になり、5日に1度になった。私はシクシク感を胃の炎症か軽い胃潰瘍だろう、と思っていた。かかりつけ医に相談したところ内視鏡検査を勧められた。

5月下旬、胃カメラ検査を受けることになった。地元の総合病院での胃カメラ検査は、内科の担当であった。検査は、はじめに麻酔入りの液体でうがいをした。ベッドに横になり、口から内視鏡の細い管を入れられた。検査担当の若い医師が「モニター画面を見て下さい」と説明しながら作業を進めた。映し出された画面の中におできのようなものが見えた。医師は「胃がんですね」と言った。胃がんの宣告はこんなものか、と思いつつ検査は終わった。

検査後、私は内科から外科へ回された。外科で、胃がんのステージⅡで入院して胃の全摘手術になる、と説明された。私の入院経験は、20代の虫垂炎、50歳代の胆嚢炎など4回あり、今度で5回目となった。

入院は、6月15日、手術は6月20日に行われた。手術は全身麻酔で、手術室のベッドで横になり医師の「これから麻酔を始めます」という声を聞きながら眠ってしまった。気持ちよく眠っていると肩を叩かれ目が覚めた。麻酔は、手術後も2日間効果が持続する方法がとられた。3日後から痛いとき、点滴から痛み止めが入れられた。4日目と6日目に身体についていたドレインという2本の体液排出用チューブが外された。

手術後の経過は順調で7月1日に退院することができた。胃の全摘手術の結果、食事の1回量が限られた。1日の必要エネルギーを摂取するには、1日3食から5食か6食に分けて食事することになった。よく噛んでゆっくり食べる食事方法が変わった。

新聞によると、がんは遺伝子の老化による病気で、加齢とともに増え、男性の場合55歳まで発症する確率は約5%、65歳で約16%になり、生涯では3人に2人が罹患すると言われる。

私は現在74歳、今まで男性の平均寿命までは生きられそうだと思っていた。退院時、医師から5年生存率70%と告げられた。この具体的数字は、私の生き方をより積極的な方へと変えた。家族に感謝しつつ、五体満足なうちにやりたい事をやろう、と思うようになった。

今年の手帳は、半年先まで予定を入れた。

村松と八十里越

五十嵐 力 (高18回)

松高一年の時、仲間二人と白山に登った。蒲原平野に春霞がたなびき、山肌に残雪が残る季節で、当時まともな登山装備も持たず、ズボンの裾を泥で濡らしながらひたすら上を目指した。さほどの苦勞もなく頂上に着いた我々は、そこで白山の奥に広がる山々の姿に思わず息を呑んだ。高度は白山と同じく1000m程度で決して高山とは言えないが、山肌を雪で覆われた峰々の稜線は、藍色の空をナイフのように切り分け、落ち込んだ溪谷には白い筋となった溪流が激しく下っている。下界で見る山の姿とは全く違う。後で地図を見て、それらは、五剣谷岳、銀太郎山、銀次郎山などの川内山塊の山々であることを知った。

高二の時、山岳部が川内山塊によく山行しており、「この間、日本平山に行った。今度は矢筈岳だ。」などという会話を羨ましく聞いていたものだ。高三の夏、受験勉強の補修で学校に行ったら、数学の山本一興先生が、川内で釣ってきたばかりだと言って、八寸ほどの山女魚をニヤッとしながら見せてくれた。

結婚して、山好きな妻と山登りを始めた。深田久弥の百名山が次に行く山の選択の目安で、北の利尻岳から南の屋久島宮之浦岳まで、日本各地の名山を随分登った。ボルネオのキナバル山(4095m)に登り、またネパールのアンナプルナ山系をトレッキングして、3400m地点から谷一つ隔てたダウラギリ峰(8167m)に朝日が差し込む姿を二人で見たのは懐かしい思い出である。上越は巻機山・谷川岳・平標山などに足を運び、長野県境の秋山郷には毎年春に出かけ、鳥甲山の切り立った峰に残雪が輝く姿を眺めていたが、川内山塊までは足を伸ばす機会がなかった。

溪流釣りを始めたのは30歳の頃からである。関東で仕事をしながら1泊2日程度で行ける範囲は限られていて、奥只見の水系がよく行く釣り場となった。叶津川での釣行では、そこが越後と会津を結ぶ八十里越の入口で、すぐ近くの塩沢が戊辰戦争で敗れた長岡藩の河井継之助の終焉の地であることを知った。また御神楽岳の東斜面の沢で釣っているとき、反対の西側から指呼の距離に川内山塊があることがわかった。只見と村松の奥は意外と近いんだと思った。80年代には溪流釣り雑誌で、早出川の源流が話題になったことがある。曰く、割岩沢の上流にあるジッピと呼ばれる逆V字溪谷は、水流が幅2mほどに圧縮され、左右の岩の高さは10m余り、上部の割れ目が1mほどの極度に狭い箇所、その奥は岩魚の楽園だ、など。しかし、胸まで浸かりながら泳いでいくしかない源流に踏み込む勇気もなく、雑誌の記事を読んで憧れるしかなかった。ここ十数年は、魚沼の破間川水系で溪流釣りを楽しんでいる。小出から入広瀬を越え、大白川の

集落を起点に浅草岳や守門岳の沢筋を巡る釣行である。左沢と呼ばれる浅草岳の源流を遡って地図を見たら、すぐ近くの尾根に登れば八十里越の道があることがわかった。ただその沢からの道はなく、遥かに尾根を眺めた。

溪流釣りは危険が伴うため、通常は釣友と行く。相互の都合がつかないときには単独となり、沢の選択にも注意を払う。2017年9月下旬、10月からの禁漁を目の前にしてもう一度釣りたいと大白川に行った。馴染みの宿がとれず、初めて泊まった民宿の本棚で一冊の本に出合った。「八十里越―記録が語る歴史の道」平成8年、社団法人北陸建設弘済会発行。八十里越に関する古文書を集め、丁寧に解説している。拾い読みをしていると、「村松」という字が何か所も出てくる。おや、と思って読み進めると、江戸の頃、八十里越の越後の起点の吉ヶ平は村松領であり、葎谷に口留め番所を置いて往来する人改めを行ったという。また、天保14年の大改修に携わった村松藩士の菊池佐五太夫・佐藤治郎兵衛の名や、村松宿本陣の梁取由右衛門の名も見える。(松高で同級生だった梁取君はその末裔か?)

越後から只見へは、米・呉服・魚の干物・農機具などが運ばれたというが、最重要な品目は塩であったという。冷蔵庫もなかった小学校時代、五泉で食べた海のは塩鮭・干レイカやエゴなどであったから、多分同じような産物が峠を越えたのだろう。また、只見からの品目には、薬用人参・麻・真綿・蚕などが見える。

雪深いこの地は一冬が過ぎれば道筋の損壊は必須で、その都度双方の集落が普請をし、更に大規模な補修が必要な場合はお上に何度も願いを上げている。いずれにしても越後と会津の南西部を繋ぐ交通路の開削から維持管理に至るまで、村松は重要な役割を担っていた。明治維新以降も往来は盛んであったが、大正に入り磐越西線が開通するに及んで、次第に物資の輸送は鉄道主体となり、街道は手入れされないまま廃道となっていったという。

昭和45年、新潟・福島間をほぼ八十里越に沿って結ぶ道路が、国道289号線に指定され、平成元年着工以来開通を目指して工事が進められている。かなり出来上がっているが完成の目途はまだ立っていない。現在、八十里越の越後の起点は三条市であり、行政上もはや村松ではない。五泉で育ち、村松で高校時代を過ごした私は、在学時代に八十里越の話題に接したことがなかった。江戸の頃に比べ、行政の区分が変わり、交通体系が大幅に変化してしまうと、村松のなかでの会話では、会津に通ずるかつての道筋は話題にのぼらなかったのかもしれない。しかし、そう遠くない開通時期を考え、150年を超える昔の村松の先達に想いを寄せると、新たな国道の開通にもう少し関心を持つべきだ、道が出来たら行ってみたい…岩魚釣りの宿の布団のなかで「八十里越―記録が語る歴史の道」を読み進めるうちに、いつか睡魔が勝ち、眠りに落ちてしまった。

酒と肴と…

金子トシ子（高15回・旧姓吉田）

「お酒は好きですか？」
「ええ、だいすきです」
ときどき会話の中に割り込んでくるこの言葉、コミュニケーションをとるには、最適なものかもしれない。
「何が好き？」 「どうやって飲みますか？」
次の質問はたいてい、これである。
「そうですねカラ酒はにがてですから、夕食のテーブルをのぞいてから決めます。」
などと、イッチョマエの事を言う私。
そうですね、と返事がかえってくる。そして暑い時にはまずビールですよね、とも。

たしかに私はお酒が好きである。けれどもただ飲めばいい、というのではない。おいしく食事をしながら、わいわいガヤガヤと会話を楽しみながら飲むのが好きなのだ。その時々によってビールだったり、ワインだったり、ウイスキーだったり、もちろん日本酒の時もある。但し断っておくが決して大酒飲みではない、と自分では思っている。

皆で飲むときのその雰囲気、その空間が好きなのである。我が家の皆がそうだからお客様、大歓迎である。来る者こばまず、去る者おわず、これが我が家のモットーであり、そして運のいい人はおいしい食卓につき、運のない人はつけものだけ、ということもたびたびである。でもそれは又、それなりに楽しい。その時、その時の話が酒の肴となり、そして又会話がはずんでゆく。

我が家がホームステイを受け入れるようになってから、もう三十年以上になるかもしれない。そんな事からいろんな国の、いろんなジャンルの話がとびかいて、お酒をかこんでの夜はあつというまに時がたつ。

もちろん私達は、出かけて行くのも大好きだし、そういう機会も多い。

今から十年以上も前の事を思い出した。

アメリカのイージス艦が新潟へ寄港した時の事である。

最初にレイク・エリー、次の年にはカーチス・ウィルバー、と二年続けての来港であった。主人と私はそのどちらのイージス艦にも乗船する機会をいただいた。当時まだお元気だった沢海の北方博物館の伊藤文古館長さんからのお電話だった。イージス艦の乗組員の皆さんが休息の為、来館されるとの事。そこでいけ花のデモンストラーションをやってほしいとのお話だった。デモといっても古式ののっとり、詩吟、お琴の演奏に合わせ限られた時間で生ける、という大がかりな生け花である。作品の大きさは高さが三メートルにもなる大作である。主人は紋付の着物に袴、そして介添えの私の着物も、もちろんそれに準ずるものを着る事になる。私は着物が大好き、それを考えただけで、わくわくしてくる。

ともあれ無事終った時には皆さんがスタンディングオベーションで喜んでくださった。

その後、艦長さんよりのレセプションの招待を受けたのである。最初の年と、今度と二年続けての招待であり、しかも今回のジョン・ラウアー艦長さんからは息子達にもと、うれしいご配慮をいただいた。新潟東港、中央第二埠頭までは幾度も検問を受ける。車のナンバー、氏名、年令のチェックを重ね、最後は車体の下まで調べるという厳重な警戒の中、私達四人は艦上の人となった。後方甲板でのパーティーは、それはそれは楽しいものだった。おいしいワイン、おいしい料理、そしてもちろん楽しい会話と、あつというまに時間が過ぎてゆく。その間に副艦長さんが私達を案内して艦内を廻って下さった。その途中に行き会う人達が又、かつこいいい!! のである。

まっ白い制服の肩、胸、袖口と色とりどりに縫いつけられた階級章が、ピリッとひきしましたスマートな体に、なんともかつこ良く似合っている。最先端の機器を誇る操縦室をはじめ、どこへ行ってもおどろきと興奮の連続で、狭い通路も着物のすそをまくって登る、はしごの様な急な階段さえも楽しかった。

後方甲板にもどり、私達は再びパーティーの輪にもどった。チャンスがあつたら又、お会いしましょうと艦上の人達と握手をして、あつと言う間に時が過ぎる。

車に戻ってふりかえると、煌々（こうこう）と輝く月が艦のシルエットを浮かび上がらせ、まるで映画のワンシーンを見る様だった。本当に夢のような楽しい一夜であった。

けれど残念なことが一つ !!

主人と息子達にどうぞ!! と言い、私がドライバーを受けおった為、一滴も飲めなかったのだ。あのキンキンに冷えた乾杯のシャンパン、おいしそうだったなあ。

あのグラスでゆれていた赤ワイン、すてきな色だったなあ。と、食べもの、いえ飲みもののうらみは、何年たっても忘れないものである。

きのこの佃煮・酒の肴に最高!

材料 なめこ・2パック、えのき茸・大1袋

昆布・10cm、酒・大さじ3、醤油・大さじ2
みりん・大さじ1

厚手の鍋に材料を全て入れ、中火で煮る。フツフツしてきたら、弱火で13分位煮て、煮汁が無くなって来たら火を止め、昆布を除き、瓶などに入れる。冷蔵庫で1週間ほど保存可能。ブナシメジ等を入れると、より美味しいが、全体の量により調味料は加減する。
えのき茸は、石づきを取り1/2に切る。ブナシメジは根元からほぐし、それぞれ1時間ほど天日干しをして冷凍する。なめこも冷凍して使うと良い。天日干しで栄養が増し、冷凍すると吸収が良くなる。

第26回松高東京同窓会親睦ゴルフ大会

平成29年4月13日(木) 越生ゴルフクラブに於いて、第26回親睦ゴルフ大会が6名の参加を得て開催されました。なお、競技は新ペリア方式で行われ、成績は下記の通りです。

成績

優勝：漆原 茂、2位：五十嵐 勝栄、3位：斉藤 豊
参加者

金子 鶴男、大橋 貞夫、今井 英雄
漆原 茂、斉藤 豊、五十嵐 勝栄



第27回松高東京同窓会親睦ゴルフ大会

平成29年10月5日(木) 生越ゴルフ倶楽部に於いて、第27回親睦ゴルフ大会を8名が参加して好天の下に開催した。競技は新ペリア方式で行い、成績は下記の通りで、次回は多数のご参加を望みます。

成績

優勝：石黒久七、2位：斉藤 豊、3位：漆原 茂
参加者

金子 鶴男、今井 英雄、漆原 茂、斉藤 豊
大橋 貞夫、石黒 久七、五十嵐 勝栄、佐藤 克



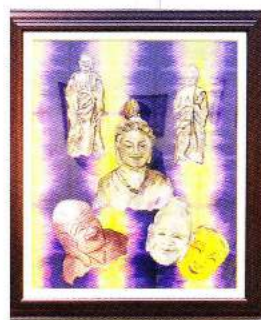
村松高校東京同窓会親睦ゴルフ大会開催と会員募集

東京同窓会では、桜咲く頃の4月と10月頃に年2回、親睦ゴルフ大会を開催しております。同窓を巣立って活躍されている皆様との懇親を深め、交流を広めていきたいと念願しております。現在、会員数は準会員を含め17人の方にご登録頂いておりますが、更なる発展を願い大勢の皆様方には是非、ご参加頂きたいものと念じております。お申し込みは下記の幹事宛まで、よろしくお願い申し上げます。

幹 事 今井 英雄 (高12回) ☎:049(296)0751 E-mail:imahid@watch.ocn.ne.jp

第33回和紙はりえ銀座展開催

木村孝子(高8)さんが所属されている美杉会はりえ展が平成29年5月23日～27日にわたって銀座の美術家連盟画廊で開催され、24日にお声がけた同窓生と一緒に拝観してきた。見事な作品が多く展示され、皆様方にも次回の開催時には、ぜひともご覧いただければと思う。



風 蕙る

塩原 知子
(高十五回)

足跡の端よりとけて春の雪
靴音のひびく通りや春浅し

春泥の底に光れる水たまり

薫風や嫁ぎゆく子の白き足袋

青田風刈られしままの草匂う

避難小屋通り抜け行く若葉風

良寛像葉ずれの音や走り梅雨

自転車鈴のひびきや夏きざす

会員をご紹介ください。～会員募集中～

東京同窓会の運営組織の拡充と財政基盤の確立のために、村松高等学校をご卒業された方やご支援いただける方をご存知でしたら、是非、ご紹介をお願いいたします。

ご紹介いただきましたら、事務局の方から会報誌見本と振込用紙を同封してご案内いたします。

東京同窓会のホームページ(下記奥付のアドレス参考)には、母校の沿革、校歌、活動内容、年間行事などをはじめ、会報誌「臥龍が丘は緑なり」の第1号から第58号まで閲覧できます。

一人でも多くの方のご入会をお待ちしています。

皆様からのご投稿、お待ちしております！

会報誌「臥龍が丘は緑なり」は、年1回発行していますが、この会報誌は、会員の皆様相互を結ぶ唯一の情報誌です。

次のような情報などがありましたら、どうかお気軽に下記までお寄せください。

- ・同級会や還暦同窓会などの開催情報
- ・旅、地域の情報
- ・趣味や日常思っていること
- ・会報誌を通じて伝えたいこと
- ・研究・発表したいこと etc

★ 字数と写真

(本文)

- ・半ページの場合：1,150字程度(題名、名前を除く)
 - ・1ページの場合：2,300字程度(同上)
- (写真の挿入)
- ・写真1枚当たり300字を本文から減ずる。

★ 締切り

10月末日

原稿送付先

☆ 石黒 勝夫 宛

〒166-001 東京都杉並区阿佐谷北6-32-19

Tel・Fax : 03-3330-4564

E-mail : isgrkto-214@outlook.jp

文字データがある場合は、メール送付をお願いします。

編集後記

今回は、多くの会員の皆さんからご寄稿いただきました。したがって、従来よりも4ページ多い20ページの編集となりました。厚くお礼申し上げます。

政府は昨年十二月八日、天皇陛下の退位日を二〇一九年(平成三十二年)四月三十日とすることを正式に決定しました。したがって、次回発行する会報誌(第60号)は、節目の号であり、かつ、平成最後の会報誌となります。内容の充実した会報誌としたと思いますので、会員の皆さんには、ドシドシご寄稿願います。

広報委員長 石黒 勝夫

平成30年2月 第59号

表紙の題名・題字は佐伯益一氏(旧中27回)の書

発行人 新潟県立村松高等学校東京同窓会 広報委員会

新潟県立村松高等学校 東京同窓会事務局

〒190-0011 東京都立川市高松町2-37-18

Tel・Fax 042-527-6482 (吉井 清)

東京同窓会HPアドレス : <http://www.matsukou-tokyodousoukai.net>